

『三葉集』

田漢・宗白華、郭沫若著

「田漢より郭沫若への手紙 その3 (下)」

(原題：「田漢致郭沫若」)

顧 文\* 岩佐 昌暉\*\*

*Kleebatt by Tian Han, Zong Baihua & Guo Moruo*

*Letters to Guo Moruo from Tian Han No. 3 (2)*

With Annotation

by

GU Wen, IWASA Masaaki

その3 (下)

沫若兄：

(続き)

ある人は「凡そ悲劇は常に死を以って終わり、喜劇は常に結婚を以って終わる」と言っています【補注1】。実は悲劇も喜劇もどちらも一つの恋愛「love」によって生まれたものです。成功は、則ち結婚（葉書を出す、出さないに拘わらず【補注2】）、恋愛の不成功は、則ち死です！Maeterlinck<sup>1</sup>は不思議な人生の真相を運命「Destiny」と見なしています。運命の二つの相は、一つは死「Death」、一つは恋「Love」です。この二種類の力が錯綜し、かつ紛糾することで、人生という舞台での各種の奇怪な喜劇や悲劇や悲喜劇が演じられるのです！そうして男女の問題に関する近代の戯曲は、そのほとんどがこういう悲劇です。例えば、結婚生活を描いた悲劇は、

即ち恋愛に基づかない結婚です。大体二種類に分けられます。一つは、「面子」【メンツ、体面】のための結婚 *marriage "to save face"*、もう一つは、金銭のための結婚 *marriage for money* 【moneyの間違い】です。所謂体面のための結婚とは、処女が同意 *Consent*、或い不同意で、男に破壊されたあと、その「処女の体面 *"face of virgin"*」を保たんがため、互いの恋愛の有無に関わらず、相手の男に正式な婚礼を求めるものです。婚礼が終われば、前々からの恥はすべて消えてしまいます。そうでないと、この女性は社交界から放逐の身となりかねません。そしてその名誉と幸福を全部失ってしまいます。金銭のための結婚とは、一般に言う所の売買結婚 *marriage for purchase* にほかなりません。前者は、島村民蔵氏<sup>2</sup>が取り上げたもの【補注3】によれば、例えば、Friedrich Hebbel<sup>3</sup>の『Maria Magdalena』

\*東海大学経営学部観光ビジネス学科教授

\*\*九州大学名誉教授 日本郭沫若研究会会長

<sup>1</sup> メーテルリンク (Maurice Maeterlinck, 1862-1949)、ベルギーの劇作家、詩人、散文家で、『青い鳥』などを著す。

<sup>2</sup> 島村民蔵 (1888-1970)、日本の演劇研究家。『芸術学汎論』等を著す。

<sup>3</sup> フリードリヒ ヘッベル (Friedrich Hebbel, 1813-1863)、ドイツの劇作家。その代表作はマリア・マグダレーネ (Maria Magdalena) で、1844年に書いた作品であ

(1943)【補注4】が最も際立ったものです。この劇中のヒロイン Clara<sup>1</sup>は、もともと才気渾発、意気が天を衝くような女性でしたが、一時の軽はずみで、軽薄な男 Leobalt【Leohalt の誤り】<sup>2</sup>によって貞操を失ってしまいました。Leohalt は彼女の嫁入り道具の資金がないことを口実に、結婚を承諾しません。彼女の父親 Anton<sup>3</sup>は、昔から謹厳で体面を重んずる人でした。この事を知り、彼女に自殺を勧めました。Clara は狂ったように憤り恨み、薄情な Leohalt の所へ行き、泣いて訴え、父親の体面のために結婚を承諾してくれるように頼みます。Leohalt は彼を愛していると誓うよう求めます。Clara は言います、「それは、お誓いできません。貴方を愛しているとか、愛していないとかをもお知らせはできません。ただ一生をかけて貴方に仕え、貴方のために働きます。決して貴方に養ってもらうことをいたしません。夜の針仕事でもして自分で食べて生きています。もし仕事が出来なければ、何にも食べないでいます……もし貴方がお飼いにしている犬が、目の前にいなかったり、貴方に追い出されたりした時、犬の代わりに私を打ち叩いたりなさっても決して声を立てて泣きません。唯歯を食いしばって堪えます……私を引け受けて下さい。なぜならば、この後私は決して長くは生きません。もし私の長生きがご心配なら、或いはもし将来離婚したらまたお金がかかるとご心配なら、薬屋へ行って毒薬を買って来て下さい。貴方はどこかに置いてネズミを毒殺するためだとおっしゃればいいです。貴方のご指示がなくても、私、自分で飲みます。もし死にそうな時、近所の人に来

る。

<sup>1</sup> クララは、『マリア・マグダレーネ』劇の中の人物である。

<sup>2</sup> レオンバルドは、『マリア・マグダレーネ』劇の中の人物である。

<sup>3</sup> アントンは、『マリア・マグダレーネ』劇の中の人物である。

<sup>4</sup> ストリンダベルク (Johan August Strindberg, 1849-1912)、スウェーデンの作家、劇作家。『伯爵令嬢ジュリア』(Miss Julia) は彼の著名の独幕劇で、1888年に書いた作品で

たら、私は砂糖だと思っていたのに、飲み間違えたなんてとしか言いません。」一語一語沈痛で、最後まで読み終えるに忍びません。Clara は一身の体面のため、父母の体面のため、家族の体面のため、このような苦痛も耐え忍ぼうとしています。しかしとうとう冷酷無情な Leohalt の許しを得られません。Clara は進退ともに窮し、遂に井戸に身を投げ、死ぬのです。これは一件です。このほかに Strindberg<sup>4</sup>の『Miss Julia』劇【補注5】があります。伯爵の令嬢 Julia が、深夜に下僕と戯れていて、貞操を失ってしまいますが、その後もこの男も結婚を承知してくれないため、Julia はどうしようもなくなり、遂に自殺してしまうという話です。また前に書いた Sudermann (ズーダーマン) の『Heimat』(邦訳『故郷』)【補注6】の中での Magda の父親 Schwartz<sup>5</sup>も以前娘の Magda が参事官の Dr. von Keller<sup>6</sup>と肉体関係を持ち、息子を生んだと聞いて、非常に驚き、両親の面目を傷つけ、一族の名誉を侮辱することを恐れて、なんと彼女に Keller との結婚を迫ります。

Magda はこう言います：——

But it is not your power, my dear father<sup>6</sup>.

Schwartz<sup>5</sup> が言います：——

Then I must die, —— then I must simply die. One can not live on when one—— you are an officer daughter's. Don't you understand that?<sup>7</sup>

最後まで Magda は自分の主張を貫き、譲歩しません。父親はただこう言うしかありません。

ある。

<sup>5</sup> フォン・ケラー博士。『Heimat』【邦訳『故郷』】劇の中の人物。

<sup>6</sup> 英語。「これはあなたの権限外ですわ、お父様。」

<sup>7</sup> 英語。「それなら、わしは死なざるを得んな。——それならわしは死ぬほかない。ひとりでは生きていけない。その人間が——お前は役人の娘なんだよ、お前それをわかっているかい？」

I don't know what may happen—— child  
——have pity on me!<sup>1</sup>

Magda のあき足りない所はまさにこの個性を主張するため、面目と人情の犠牲になることを承知しない点です。即ち彼女の個性の強さです。僕の友人である某君が家族の問題で、その父親に結婚の約束をさせられました。友人がもし父の命令に逆らって結婚しないと、彼の家族はその原因で破産してしまいます。父の命令に従って結婚したなら、相手の女性は彼の不満の種となり、その後の一生の幸せもこれによって失われざるを得なくなるかもしれません。犠牲になるか？拒絶するか？正義を貫くか？人情に従うか？某君は、このことで長く悩み煩っていましたが、遂に拒絶に至りました！これもまあ男の Magda と言えそうです。彼の同郷の者たちはそれで彼のことを頗る非難しました、ああ！部外者にどうして傷心者の心中が分かるのでしょうか？しかし、僕は、この事情について、絶対的な意見がありません。各自の心の安らぐ所に従って処理すればよいと考えます。なぜならば、相互を犠牲にしようというのは、人類、いや、生物界の相互扶助の生活における最大の精神ですからね！

宋春舫先生に「野卑で、凶暴、猥褻で言うに足りない」【補注 7】と評された一人である Alma は、1889 年 Sudermann の処女作『名誉』のヒロインです。さきに書いた『Die Ehre』は、こうした面目のための結婚に反対するものです。Alma なる人物は、ある労働者の娘です。年頃の子で容姿は淑やかで美しい。当然虚栄心も盛んで、遂に某大工業家の息子である Kurt に誘惑され、妾同然に見なされています。ですから、私たちは、Alma が「野卑で、凶暴、猥褻で言うに足りない」と罵倒するより、寧

ろ Kurt<sup>2</sup>の人格こそ「野卑で、凶暴、猥褻で言うに足りない」と罵倒するほうがよいのです。資本家の息子は、労働者の子女を道端の柳や、垣に咲く花ぐらいに思っ、好き勝手に折ったり摘まんだりするのが、殆ど慣例のようになっています。ですから社会主義詩人 E.Nesbit【補注 8】の『A Last Appeal』<sup>3</sup>の二つの詩句は最も沈痛なのです。

Our sons would be honest, our daughters be pure,

If our wages were more certain, your vice less sure——。

もし、我らももっと賃金を得られ、あなた方の罪業がもっと少なければ、

我らの息子はきつととても真面目であり、我らの娘もきつととても純潔であろうに！

Alma は、もし女の栄華に執着すればそれでもいざこざなしに仲良く暮らしていけますが、思いもかけず、Alma の兄 Robbert<sup>4</sup>——某大工業家【Alma の相手の父親】の東洋派遣社員——が任地から帰郷し、その妹の行為を探って知り、大変憤慨したのです。某大工業の企業家はそれを知ると、とても恐れ、すぐにも多額の小切手を Alma の両親に送り、息子の不祥事を闇に葬りたいと思っています。Robbert は、どうあっても承知しません。Kurt が妹と正式に結婚しなければ、彼は、Kurt と決闘するというのです。

当時 Robbert には、人となり真面目で英邁な某伯爵という親友がいました。その伯爵が彼に忠告してこう言ったのです。「世の中のあらゆる物には、すべて交換価値というものがある。処女の体面も亦同じだ。君の家の体面は、只少しの錢で直ぐに取り戻すことができる。また、「処女の体面」とは何だ

<sup>1</sup> 英語。「わしには何が起きようとしているのかわからん、——マグダ——わしのことを哀れだと思ってくれ！」

<sup>2</sup> クートとは、スーデルマン『名誉』劇中の人物。

<sup>3</sup> イーデイス・ネズビット (Edith

Nesbit, 1858-1924) とは、英国作家、詩人。著作には『社会主義のバレエと抒情詩』などがある。『A Last Appeal』とは、つまり『最後の咆哮』のことである。

<sup>4</sup> ロバットとは、『名誉』劇中の人物。

ろうか？将来の良人にとっての、誠実と純潔という一種の嫁入りの条件ではないのかね？処女が体面を重んずる目的はただ結婚にあります。だから君の妹も、もしカネを持っていたら、それ以前より更に価値のある婦人になることができるんじゃないかい？」この話は残酷ではあるけれども、Robbertも彼の話聞き入れないわけに行きません。こうして初めて事は穏便に解決したのです。この事とこの話はすべて女子の貞操問題との大きく関わっていると僕は思います。某伯爵の話もいくらかの真理があると云わざるを得ません。

1906年、イギリスのSt.J.Hankin氏が書いた『last of the DeMullins』<sup>1</sup>という劇も、その反抗は「体面を重んじる」結婚の心理として、一般の女性の社会的言動にも頗る影響を及ぼしています。同時にS.Houghton<sup>2</sup>の『村祭り』とA.Salsworthy<sup>3</sup>の『長男』という二つの劇もすべて同一の思想を鼓吹しています。とくにSalsworthyの『長男』Eldest son: A Domestic Drama in 3 Acts<sup>4</sup>は一般には代表的な告白だと見られています。前述Hankinの劇『DeMullins』のヒロインJanet<sup>5</sup>は無神論者で、唯物論者です。たまたま八年前の元恋人——ジャネットとは、彼の息子を産んでいます——出会いました。彼女の両親も非常に謹厳、かつ頑固な人で、その娘に元恋人と正式に結婚するよう迫ります。しかし、かれらの間にはもう愛情はありません。ジャネットJanetは条理にかなった議論を述べて、正式に両親の要求を拒絶しました。「あの人もまああの人にみえますが、しかし夫として価値はありません。以前彼とは愛し合ったことがあります、今はもう赤の他人ですよ。今は息子が可愛いだけです」

と言いました。

ジャネットは、男女の交際を、性交が第一、精神的交流が第二と考えています。ですからまず生殖が大切、その次が、悦楽です。どうやら本能的な恋愛を重んじ、精神的な恋愛をその次にしているのです。Free love<sup>6</sup>が第一、Pure love<sup>7</sup>はその次ということです。島村民蔵君のこぼを借りれば、所謂処女としての本能（性交）さえ満足させられれば、その上さらに婦人と母としての本能（出産と育児）が満足させられれば、もう女として一生の価値が得られるというのです。将来の予測できない利害関係に至っては、いささかも顧みないというのです。これも大いに一種の物質主義の婦人観を代表するものでしょう。概して言えば、女性の体面は、すでに決して「正式結婚」という四文字だけに配慮することはできなくなっています。すべてその主観的な観察とその人が如何なる立場に立っているかに関わってきます。例えば、君たちの今の生活は、もともと真の愛情の結合によって、運命の神の魔手loveによって左右されてきたものです。愛に基づかない結婚とはすでに違います。だとすればEllen Keyの意見に従えば、貴方達の結婚には罪悪とはありません。ましてすでに芸術品a word of art【生まれた子供】があります。それこそちょうどEllen Keyの話の繰り返しになりますが、父母たる者は、曾て正式に結婚したかどうかにかかわらず、生まれた子女に対して責任を負う者は恒に神聖であり、責任を放棄する者は恒に罪悪なのです。今後、君が罪悪であるか否かは、和生【生まれた子供につけた名前】に対する君の姿勢の如何によります。当然、葉書を出すかどうかなど、問題にならなくなるわけです。君たちが私たちに用

<sup>1</sup> セント・ジョン・ハンキン (St. John Hankin, 1869-1909) とは、英語の劇作家。

『last of the DeMullins』とは、即ち『最後のド・ムラン家』

<sup>2</sup> スタンレー・ホートン (Stanley Houghton, 1881-1913) とは、英国の作家。

<sup>3</sup> A.Salsworthy とは、ジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy, 1867-1933) のことである

う。英国作家で、長編小説『島のパリサイ人』、『フォーサイト家の物語』などを著す。

<sup>4</sup> 英語。三幕ものの家庭劇。

<sup>5</sup> ジャネットとは、ハンキンの『最後のド・ムラン家』劇中の女主人公である。その次文のJanetのことである。

<sup>6</sup> 英語。自由恋愛という意味である。

<sup>7</sup> 英語。純潔な恋愛という意味である。

意して下さった「催粧宴」【補注9】については、必ず受けに参ります。

さらに金銭のために結婚するのも、近代劇の中では、その例は少なくありません。イプセンの劇の中にとりわけ多くみられます<sup>1</sup>。例えば——

『Ghosts』の Alving 夫人<sup>2</sup>は、その本当の愛人である穹牧師を捨てて、お金持ちの軍人に嫁ぎ、その後、あんな結果【補注10】になってしまいました。『Lady from the sea』の Ellida<sup>3</sup>は裕福な医者の後妻として嫁ぎ、愛のない家庭を営んでいました。再び昔の恋人の誘惑に負けました。その夫は Ellida の気持ちを悟り、自ら夫としての権利を放棄し、Ellida が自分の自由と責任を以て選択するように任せました。Ellida がその夫を徳によって愛することができると感じました。遂に Can now live wholly for each other<sup>4</sup>——のです。ああ、中間の警句で、例えば Wangel (医者) がこう言います。

Now you are set wholly free from me and mine.

Now your own true life can return to its — its right groove again.

For now you can choose in freedom; and on your own responsibility, Ellida<sup>5</sup>.

Ellida が慌てて尋ねました：——

In freedom — and on my own responsibility?

<sup>1</sup> イプセン (Henrik Johan Ibsen, 1828-1906)、ノルウェーの劇作家。『社会の柱』、『人形の家』などを著す。

<sup>2</sup> 英語。『幽霊』劇中のアルヴィング夫人。

<sup>3</sup> 英語。『海の夫人』劇中のエリーダ。

<sup>4</sup> 英語。「今や、ぼくたちは、完全に互いのために生きることができるようになった。」

<sup>5</sup> 英語。「これからは違うよ。これからは僕と僕の家族にまったく縛られなくていいんだ。君の人生、君の本当の人生をすべて元の通りに歩いていけるんだ。エリーダ、今や、君は自由に選択していいんだ、自分の責任でね」

<sup>6</sup> 英語。「自由に——自分の責任で？ 自分の責任！ それなら、事情はは全く変わってしまいますわ」

Responsibility! this transforms every thing!<sup>6</sup>

その昔の恋人は、Ellida が自分についていく意思がないと見て取り、言いました：—— “I see it. There is something here that is stronger than my will.”<sup>7</sup>

君はこの前の手紙であのひ弱な靈魂を、言及していましたね、僕は大変過信でした。

“I think, there must be something stronger than your will.”<sup>8</sup>!

後に、Wangel は妻に問いました：——

But now you will come to me again, Will you not, Ellida?<sup>9</sup>

彼の妻は答えました：——

Yes, my dear, faithful Wangel — now I will come to you again.

I can now, for now I come to you in freedom — of my own will — and on my own responsibility.<sup>10</sup>

二人は既に結婚の形を築きました。こうして二人の幸せな生活に入ってしまったのです。

また『Hedda Gabler』<sup>11</sup>の Hedda は、新婦人 new woman で、贅沢な生活と高い地位を期待して、遂に迂腐な学者のテスマン<sup>12</sup>と結婚したのですが、理想と現実の事実が大きく衝突する結果になってしまいました。

<sup>7</sup> 英語。「わかった。ここには僕の意志よりもっと強いものがあることがね」

<sup>8</sup> 英語。「ぼくは、君の意思よりもっと強いものがあつたに違いないと思うよ」

<sup>9</sup> 英語。「だけど、エリーダ、君は今僕ともう一度一緒に暮らしたいんだよね？」

<sup>10</sup> 英語。「そうよ。あなた、忠実なヴァンゲル、これからは、もう一度あなたと暮らしたいわ。かれからは、私はあなたと一緒に生活する。自由な私自身の意思で、そして私自身の責任で」

<sup>11</sup> 『ヘッダ・ガーブレル』、イプセンの四幕劇で、1890年に出版された。ヘッダ (Hedda) は、劇中の女主人公である。

<sup>12</sup> 即ち『ヘッダ・ガーブレル』劇中のヘッダの主人であるジョージ・テスマンのことである。

『Little Eyolf』<sup>1</sup>の男女主人公は、男は、生活の安泰のを当てにしている、女は肉欲の満足が目当てで、両者の間にすでに一種の偽りの結婚が成立していますが、その結果も遂に明白です。

沫若よ！近代に止まらず、遠古以来、この二種のために——体面のためと、金銭のために——結婚し、犠牲になった者は本当に何千何百万という数を下りません。僕たち二人は、何と幸いにも免れたのでしょうか！これは、僕たちの神様に感謝しなければいけないことです。僕たちは、如何なる困難、如何なる煩悶を経験したとしても、僕たちの愛について言い出せば、全身の勇気が溢れるほど湧き出してきました。僕は、恋愛公開の主張を放棄しないといけなくなりました、替りに恋愛の神秘を謳歌します。僕は、敢えて『沈鐘』The Sunken Bell【補注 11】の Heinrich に倣って叫びます：——

What's happened to me?.....

From what wonderous sleep

Am I aroused?.....what is this glorious sun

That, streaming through the window, gilds my hand?

O, breath of morning! Heaven, if' tis thy will —

If' tis thy strength that rushes through my veins —

If, as a token of thy power, I feel

This strange, new beating heart within my breast?

Then, should I rise again — again I'd long

To wander out into the world of life:

<sup>1</sup>英語。『小さいなエイヨルフ』。イプセンの劇本である。1894年出版された。

<sup>2</sup>英語。僕はどうしたのだ？……何という奇妙な夢から僕は目覚めたのか？この輝かしい太陽は何だろう？その光の激流が窓を突き破って、僕の手金に金のメッキをほどこす。ああ、早朝の呼吸！神よ、それはあなたの意志でしょうか——あなたの力が、僕の血管の中を奔流しているのでしょうか？——

And wish, and strife, and hope, and dare and do.....

And do..... and do.....!<sup>2</sup>

僕の Neo-Romantic【補注 12】の劇曲との出会いは、『沈鐘』から始まっています。今でもまだ Rauten delein<sup>3</sup> Heinrich の印象が生き生きと残っており、同時に一種の神秘的な活力もまたその時から僕の内部の生命の川の中に流れ続けています。僕は、もし僕達が芸術家となろうと思うのであれば、一面では、人生の暗黒面を暴露し、世間の一切の虚偽を排斥し、人生の基本をしっかりと立てるべきだと思います。一面では、人々をよりいっそう一種の芸術の境界へ導き、生活を芸術化 Artification させるべきなのです。即ち人生を美化 Beatify し、人々に現実生活の苦痛を忘れさせ、一種の陶醉と法悦が渾然一体となる境地に引きこまなければ、その本領を尽くしたことはないと思います。例えば、『沈鐘』という劇は、一種の芸術生活と現実生活との衝突の悲劇を描写したものです。しかし、最後の幕まで見終えますと——

Rautendelein.(Embracing heinrich, she Presses her lips to his, and then gently lay him down as he dies.)

Heinrich!

Heinrich(ecstatically) Hark! .....’ Tis the music of the sunbells’ song!

The sun..... the sun ..... draws near!..... This night..... is long!

あなたの力のしるしとして、僕の胸の中で新しく異なる鼓動を感じるのではないでしょうか？——それなら、僕は再び立ち上がり、——再び渴望しなければならない。生活の世界に踏み込む旅に出ることを：祈り願う、競争し、希望し、奮闘する……更に創造を実現する、創造を、創造を……！

<sup>3</sup>ラウデンデライン、『沈鐘』中の人物名。

(Dawn breaks. He dies)<sup>1</sup>

それほど悲惨や痛ましさを覚えず、却ってハインリヒと同様に、僕たちの心も the Land of ecstasy<sup>2</sup>【エクスタシー】の恍惚状態に引きこまれて行きました。世間には悲しみが極点に達すれば、喜びが生まれる、喜びが極点に達すれば、悲しみが生まれるということはめったにありません。悲しみと喜びは Chesterton<sup>3</sup> の言葉のように、一物の両面に過ぎません。悲しみと喜びの区別がはっきりしているのは即ち Realism の精神です。悲しみと喜びともにその本体を、悲しみも喜びも超越した永劫的に美しい境地に変形させれば、これこそ Neo-Romantic の本領です。近代劇の中ではこの類の運動が非常に勢力を持っています。欧州大陸では、前述した Gerhart Hauptmann の『Die Ver sunkene Glocke』<sup>4</sup>と彼の『Hannele』<sup>5</sup>の外にも、Rostand の『Chantecler』、『Cyrano de Bergerac』、『La Princesse Lointaine』

<sup>1</sup>英語。ラウデンデライン（彼女はハインリヒをしっかりと抱いて、唇を押し付けた後、そしてそれからまもなく亡くなる彼の身体をそっと置いた。）ハインリヒ！

ハインリヒ（夢中になって）聞いて！…  
…この沈む鐘が曲を奏でているわ！

太陽が……太陽が……すぐそこに近づいてくる！……夜はなんて長いんでしょう！

（夜が明ける。彼は死ぬ）

<sup>2</sup>英語：心酔、夢中になる境地。

<sup>3</sup>チェスタトン（Gibert Keith Chesterton, 1874-1936）、英国の小説家、記者であり、文学批評家である。

<sup>4</sup>ドイツ語：ゲルハルト・ハウプトマンの『沈鐘』。

<sup>5</sup>ドイツ語：『ハンネル』（即ち『ハンネルの昇天』）

<sup>6</sup>フランス語：ロスタンの『東天紅』、『シラノ・ド・ベルジュラック』、『遙かなる姫君』等。ロスタン（Edmond Rostand, 1868-1918）とは、フランスの詩人と劇作家である。

<sup>7</sup>フランス語：モリス・メーテルリンクの『マレエヌ姫』、『青鳥』、『ペルアスとメリザンド』、

<sup>6</sup>;etc. Maurice Maeterlinck の『La Princesse Maleine』、『L'oiseau bleu』、『Peil'eas et Melisande』、『Mon na vanna』,etc<sup>7</sup>, Hugo von Hofmannsthal の『Elektra』, 『Der tor und der Tod』<sup>8</sup>がそうです。英国方面では、例えばアイランドが最も盛んです。William Butlar Yeats の『The Countess Cathleen』, 『The Land of Heart's Desire』, 『The Hour Glass』, 『The Shadowy Waters』, 『Where there is nothing』<sup>9</sup>. Lady A. Gregory の『Dervorgilla』, 『Hyacinth Halvey』, 『The Rising of The Moon』, etc; <sup>10</sup>John Millington Synge の『The well of the Saints』, 『The Playboy of the West ern World』, 『Riders to the Sea』, 『Deirdre of the Sorrows』, etc.<sup>11</sup>等があります。様々な美作品、紙には書き切れないほどあります。これらのものはすべて中国に紹介したいのです。近頃 Ludwig Lewisohn の『The Modern Drama』<sup>12</sup>を読んでいます。現代劇作の全般についてその説明は実に豊富で、かつ透徹しています。全書は五章に分かれています。第一章は、「近代劇の基礎」について

『モンナ・ヴァア』等。

<sup>8</sup>ドイツ語：フーゴ・フォン・ホーフマンスタールの『エレクトラ』、『痴人と死』。ホーフマンスタール（1874-1929）とは、オーストリアの頽廃派詩人、劇作家である。

<sup>9</sup>英語：ウィリアム・バトラ・イエイツの『伯爵夫人キャサリン』、『念願の郷』、『水時計』、『陰に包む湖面』、『そちらは何にもない』。イエイツ（1865-1939）とはアイランドの劇作家、詩人である。

<sup>10</sup>英語：ラダイ・ア・オーガスタ夫人の『Dervorgilla』、『Hyacinth Halvey』、『月の出』など。グレゴリ夫人（Lady Augusta Gregory, 1852-1932）とは、アイランドの劇作家、劇作の活動家である。

<sup>11</sup>英語：シングの『聖者の泉』、『西の国のプレイボーイ』、『海に騎り行く人々』、『悲運のディアドル』等。シング（1871-1909）とは、アイランドの劇作家である。

<sup>12</sup>英語：ルデヴィゲ・ルイソンの『現代劇作』。ルイゾン（1882-1955）は、アメリカの小説家、評論家である。

説き；第二章は、「フランスの写実劇」；第三章は、「ドイツの写実劇」；第四章は、「英国演劇界の復興」；第五章は、「近代劇における新ロマン主義の運動」について述べています。もしこの書をちゅうじつきちんと正確に中国へ紹介できたら、近代劇を研究する国内の人たちは必ずや一つの指針を得られると思います。今は、少なくとも最後の *The Neo-Romantic Movement in the Modern Drama*<sup>1</sup> は訳したいと思っています。

沫若！僕は本当に幸せです、Neo-Romantic Drama は、『沈鐘』のほか、新劇が沈滞しているこの日本で最近また『青い鳥』Blue Bird を見ました。『青い鳥』は Materlinck の最も歓迎された劇作であること、言うまでもありません。英国、フランス、ロシア、アメリカ、どの国でも翻訳され、上演されています。日本でもかつて翻訳されました——僕も二種類の日本語訳を見ている【補注 13】——しかし上演はこれが初めてなのです！以前、上山草人夫妻<sup>2</sup>の近代劇協会が上演しようと考えていたと聞きました。舞台意匠と衣装、それに演出法などすべてが非常に難航したため、遂に上演を見送ったということです。しかし、今回は、とうとう民衆座の諸君たち——とりわけ、例えば照明と舞台監督の責任をもつ田中（草黎）波君<sup>3</sup>（昨年すでに彼の近代劇協会での Anton Chekhov の『Uncle Vanya』<sup>4</sup>で医者役を演じているのを見ました）、さらに衣装と舞台意匠をとりしきる岡本婦一君<sup>5</sup>——がやり遂げました、この劇は

民衆座が 2 月 11-17 間に有楽座を借りて上演しました。僕は 16 日の夜に見に行ったのです。この劇の脚本は以前も英訳されたものをざっと見ましたが、どうしても親しみが持てませんでした。さらにパンだとか、火、犬、猫、Milk<sup>6</sup>、光、ポプラ、兔、柳、時間、星、露などといったもの……や、すべてをそれぞれを擬人化しないとイケません。本当にどう演出すれば良いか分かりません。しかしあの晩は、本当に僕は見識がずいぶん広まり、一段と情緒が豊かになり、さまざまな奇想天外なことを考えさせてもらったと思います。君たちもこちらに来て一緒に見られたらと思ったことでした。あの夜は、Tytyl を演じた水谷八重子<sup>7</sup>、Mytyl を演じた夏川静江<sup>8</sup>、光の精を演じた吾妻光<sup>9</sup>は、みんなとても素晴らかったです。上海の共舞台で小香紅らが演じた『宏碧縁』【補注 14】を見たとき、ある感想を抱いたことを思い出しました。それは、彼女たちの資質はいずれも素晴らしいの、残念なことに彼女たちに演じさせるような良い脚本はありませんし、どう演ずるかのいい教育もありません。まして彼女たちが演じているのが何であるかを理解する観劇階級もない、ということです。今後僕たちの責任は本当にだと思ったのです。観劇階級について言えば、本当に重要な課題です。ちょっと微妙で Poetic<sup>10</sup>な味わいのある劇以外は、いつも時代の好みに合いません、一言で言えば、即ち見ても理解できないのです。かつて有楽座で四、五回劇を見ましたが、『Merchant of Venice』<sup>11</sup>、

<sup>1</sup> 英語：現代劇における新ロマン主義運動。

<sup>2</sup> 上山草人（1884-1954）、本名上山貢、日本新劇初期の俳優である。文芸協会に参加し、伊庭孝などと一緒に近代劇協会を組織した。

<sup>3</sup> 畑中蓼坡（1877-1959）とすべきである。本名は畠中作吉、日本新劇初期の俳優で、舞台監督で、新劇協会の組織者でもある。

<sup>4</sup> 英語：アントン・チェホフ【1860-1904、ロシアを代表する劇作家である。】の『ワーニヤ叔父さん』。

<sup>5</sup> 岡本婦一が正しい。日本初期新劇の関係者、舞台及び衣装設計担当。

<sup>6</sup> 英語：牛乳。

<sup>7</sup> チルチル、『青鳥』劇中の人物。水谷八重子（1905-1979）、日本新劇初期の俳優、映画俳優である。『冬薔薇』、『芸・夢・生命』などを著す。

<sup>8</sup> ミチル、『青鳥』劇中の人物。夏川静江、また夏川静枝ともいう。1909年に生れる。日本早期新劇の俳優、後に著名な映画俳優になる。

<sup>9</sup> 吾妻光、日本新劇初期の俳優、新劇協会の会員である。

<sup>10</sup> 英語：詩的。

<sup>11</sup> 英語：『ヴェニス商人』、シェイクスピアの名劇である。

『Lady Windmere's Fan』<sup>1</sup>、『Uncle Vanya』、……などを見た時、また歌舞伎座で『沈鐘』を見た時、及び今回『Blue Bird』を見た時も、同席の日本人はみんな「何を演じているのかぜんぜん分からない」と言うのです。以上から分かるように文芸の素養のない人と情緒劇、象徴劇、神秘劇と問題劇などといったものについて話すと、理解できる人を見つけるのはとても難しいと思います。ですから、新劇の隆盛を望むなら、まず良質の観劇階級を育てる必要があります！ですから普通の国民の文芸思想の普及は緊急の上にも緊急のことです。本当の恋愛をするなら、二人ともその感情とその気分の分かる人でなければいけません。近代劇もその情を知り、その趣を知る「周郎」<sup>2</sup>が多く出なければいけませんね。

たまたま近代劇の話になり、知らず知らずに沢山書いてしまいました。新しいPen<sup>3</sup>も、ちびてしまいました。数えてみましたらもう十八枚を超えています。どうやらすでに一篇の近代劇と恋愛問題、結婚問題に関する小論文になりそうです。話がずいぶん逸れてしまい、君を勉強の時間もないような目にあわせてしまいました、たぶん君の薬学の試験もまたぼくのせいで失敗してしまうことになるでしょう。やはり幾つかまともなことを書いて、を置きます。

君の写真を、今日の午前中に受け取りました。ちょうど僕の恋人も僕の所に来ていたので、ついでに君の手紙と写真、両方とも彼女に見せました。彼女は君たちにお幸せにと言ひ、同時に「Anna san niyorosiku!」<sup>4</sup>と伝えてと言っています。今年17歳になったばかりですが、僕よりずっとしっかりしていますね。

最近、僕は写真を撮っていないので、送れる写真がありません。春休みに行く時には必ず先に電報を出します。僕を出迎えてくれる時に僕の方が貴方を知っていれば十分でしょう。ああ、ありました！叔母【母方の弟の妻】易陳穎湘夫人と一緒に撮ったのを貴方に送ります。しかし、これは民国七年に撮ったものです。今は、もしかしたらその時より精神的にずっと良いかもしれません。なぜならば僕には「筆を執れば、疲れを知らず」の能力があるからです。

「Goethe 研究会」【補注15】について、僕も前からこのような考えをもっていました。まず同志がたぐさいなかったもので、白華と話したことがあるだけです。もし同志を多数集められれば、会を組織し、一、二年の内に Goethe の傑作及び彼についての著名な方たちの評伝を全部中国に移植します。Goethe 作品紹介の後、こんどは彼のことまで紹介のは大変喜ぶべきことです、それは本当に中国文化界にとって喜ぶべきことです。しかし、僕はこの事は暫くは、また何人かの同志でできる所まで全力を尽くしてやったほうが良いと思います。そんなに沢山の同志がいるとは限らないでしょう！君はこの前白華に出した手紙で、Goethe の『Dichtung und Wahrheit』【補注16】に触れていましたが、この本は本当にいわゆる「自叙伝の告白文學の白眉」です。日本の生田長江氏がかつて『我が生活ヨリ』<sup>5</sup>、『Aus Meinem Leben』<sup>6</sup>【補注17】として訳しましたが、一卷だけ出して終わりました。昨年年末にこの書の英語訳『Poetry and Truth』——From my own Life——(M.S.Smith による翻訳)<sup>7</sup>を購入することができました。1913年に出版したものです。そのほか、幾つかの Goethe の

<sup>1</sup> 英語：『ウインドミヤ夫人の扇』。英国劇作家ワイルドの脚本である。

<sup>2</sup> 即ち周瑜 (174—210)、字公 (王謹)、廬江県 (今安徽舒城) の人。三国の時に呉の国の將軍。『三国誌・呉書・周瑜伝』：「瑜、少にして音楽に精通す。三爵の後と雖も、其れ闕の誤りあれば、瑜必ず之を知り、之を知れば必ず顧 (ふりむ) く。故に時人諺いて曰く「曲に誤りあらば、周郎顧く」と。」(周瑜は若いときから音楽に精通しており、演奏中に別人が間違えると必

ず振り向いた。そこで当時の人々は「演奏に誤りがあれば、周瑜は振り向く」と歌った)。田漢の意は、近代劇の向上のためには、近代劇に精通した大量の観客が必要だということ。

<sup>3</sup> 英語：筆。

<sup>4</sup> 日本語のラテン語表示：「アンナさんによるしく」

<sup>5</sup> 日本語：『私の生活の断片』

<sup>6</sup> ドイツ語：『私の生活の断片』

<sup>7</sup> 英語：『詩と真実』——私の生活の断片

伝記及び彼の有名な劇と詩集、評論も手本にあります。これらの乏しい資料で一篇の Goethe 伝を書きたいと思っています。もし着手する時には、君の助けが必要になります。僕に素材と意見を提供して下さい。白華が Goethe の宇宙観と人生観を書きます。今ちょうど Shokawa 君の Goethe 詩研究【補注 18】の中の彼の宇宙観、人生観、芸術観の一章<sup>1</sup>を訳していますが、また終わっていないんです！仿吾【成仿吾】兄の所へは行ってまだ会っていません、前回行きましたが、彼は家にいませんでした。彼がこの会に参加できるよう本当に願っています。僕は今のところもう日本に長く居たくありません、一旦機会があれば、London、或いは New York<sup>2</sup>方面へ行きたいです。特に London は願う所です。そちらには同郷の皮宗石、楊端六と郭之奇らの先生たち<sup>3</sup>が居られるし、大陸とも接近していて、いつでも Paris、Berlin、Rome<sup>4</sup>など各国の首都の芸術界との触れ合いができるからです。今日もまた遅くなりました！Anna 嬢さんと LittleHoh【中国語の「小和」つまり、和ちゃん、の意】におやすみなさいと申し上げます。

君の弟田漢

九、二、二十九

【民国 9 年、大正 9 年、1920 年】

Note<sup>5</sup>:——君が以前白華に出した手紙、及び白華から君あての手紙、僕が君に出した三通の手紙、君から僕宛ての二通の返事、或いは君が僕にもう一通返信を書いてくれて、まとめて一緒に発表しても

(M.S. スミス訳)

<sup>1</sup> 田漢が訳したのは塩釜著『ゲーテの詩研究』の中の一章である。原題は『ゲーテの詩に現れた思想』で、1920 年 3 月 15 日の『少年中国』第一巻第九期に発表（発表時の題名は「歌徳詩中所表現的思想」）された。題目の下に「この訳を白華兄の研究机上に進呈する」と綴っている。訳文の文末に「訳者敬辞」と「沫若の付白（追加説明）」がある。詳しく付録を参照されたい。

良いでしょうか？もしかまわないのであれば、全部僕に送って下さい（僕自分の手紙は原稿が残っていません）。『少年中国』に投函し、真の生活の愛好者たちに贈ります。

付録

田漢が翻訳した『ゲーテの詩に現れた思想』は、『少年中国』第一巻第九期に発表する時、文末に田漢と郭沫若の後書きを加えました。ここに付け加えておきます。以下のようなのです。

訳者敬辞：——

1. 訳者のこの文を訳せし動機は、去年十月滬を過し時、おや摯友宗白華兄と曾て歌徳（ゲーテ）研究の事に談及せし為に因る。白華已に称す『歌徳の世界観と人生観』を作らんことを擬すと。訳者も亦た謂へり、日本東京に回えりし後、亦た当（まさ）に歌徳に于（お）いてし紹介する所あるべしと。今年新友郭沫若兄、白華と書札を往還し、又此の事に及べり。偶（たまたま）塩釜 Shokoma（天飆）学士著す所の『歌徳詩的研究』を檢（しら）ぶ。第一篇、即ち本論は、凡て分かちて三項と為す。一、歌徳の世界観、二、人生観、三、芸術観たり。総覽一過するに、頗る精論多し。以為（おもえ）らく、若（も）し訳出せば、白華の研究の一助に供す可く、歌徳を研究、或いは了解せんことを欲する者もまた、以って許多（いくた）の観察力を添うべし、と。先后三兩日を費やし、幸いにも訳成り了（おわ）る。

2. 篇中に引く所の各詩、尽く金玉の句多し。訳者、筆拙にして、学浅く、訳出する能わず。以って

<sup>2</sup> 英語：ロンドン、或いはニューヨーク。

<sup>3</sup> 皮宗石（1887—1976）、字は皓白で、別名は海環という。楊端六（1885—1966）、別名は、楊冕、楊超ともいう。郭之奇（1888—1980）、家偉ともいう。以上三人とも湖南長沙の人で、早年、同盟会に参加し、日本、英国に留学していた。

<sup>4</sup> 英語：パリ、ベルリン、ローマ。

<sup>5</sup> 英語：注釈。

白華に呈す。白華は解人【作品の意味が理解できる人】なり。因りて必ずしも訳出せず。而（しか）れども一般読者なれば則ち殊に不利ならん。茲（ここ）に郭沫若兄訳出を委託せり。特に沫若に対し感謝を致す。

沫若の後書き：——

詩の生命は、すべてあの捕捉できない風韻にある。だから僕が、訳詩の腕には、直訳、意識のほかに、ある種の「風韻訳」があるべきだと思う。しかし僕のような浅はかな者は、ゲーテの詩を読んでも、その言葉遣いや意味を理解を求めただけですでに苦しく；彼の風韻ということになると、僕にはそれらよりもっと捕捉できない中の捕捉できないものなのだ。寿昌兄が僕に拙い翻訳を献呈せよという以上、僕も仕方なく無理矢理に訳してはみた。しかし、これらのものは、ただ読者と諸君の替わりに Lachgas<sup>1</sup>（笑気ガス）をばら撒いただけのことだと思う。

#### 本文のテキストと翻訳について

本文は『三葉集』に収める、田漢の郭沫若宛書簡三通の翻訳の前半である。底本、注釈は前回と同じで、『三葉集』（田漢・宗白華、郭沫若著 上海書店刊行 1982年6月）を底本とし、脚注部分は『郭沫若全集』文学篇 第15巻（人民文学出版社 1990年7月）の孫玉石（北京大学教授）注に従った。ただし、一部内容を改めたり、増やした箇所があるのも、前回と同様である。

また、この翻訳の作業の経緯は前稿（「我的作詩的経過」と『三葉集』その1、2）と同様である。

**訳注** 本文の単語など原本の脚注以外に注釈が必要と判断したものは当該の語の直後の【 】内に示した。

**補注** 本文中、背景の説明が必要と判断したものは、

以下に「補注」として掲げた。

【補注1】 バイロンの『ドン・ジュアン』に「すべての悲劇は死を以って終わり、すべての人生劇は結婚を以って終わる」とある。

【補注2】 田漢はこの手紙の前便（1920年2月18日付）で、平塚らいてふが『淑女画報』に書いた文（結婚には結納だとか結婚式だとかは必要ない。しかし結婚は社会に報告する必要がある、そのためには披露宴もよし、ハガキで知らせるのも悪くない）を引いて、郭沫若とアンナの結びつきについて「（平塚らいてふの趣旨から言えば）君たちの結婚は、何枚かのハガキを追加すれば完全なものになると言えます」と書いている（前号68頁、補注10）。ここはそれを前提とした文で「社会に通知するかどうかは別にして」の意

【補注3】 島崎民蔵のどういう発言を根拠にしたものか不明。

【補注4】 フリードリッヒ ヘッベルの『マリア・マグダレーネ』は吹田順助（1883-1963）訳で1910年警醒社から出版されている。

【補注5】 榊原貴教作成「ストリンベリ翻訳作品年表」によれば、ストリンベリの作品は1912年上田敏訳「西欧自然派戯劇論」が『中央公論』5月—8月号に掲載されたのが最初らしい。『Miss Julia』は、1912年島村民蔵により「伯爵令嬢」の題名で『シバイ』1月—3月号に訳載され、翌13年7月島村抱月訳として同題で『近代脚本叢書5』現代社、に収録出版された。また、日本での初演は1925年築地小劇場である。

【補注6】 ズーダーマンの『故郷』については、顧文・岩佐『三葉集』田漢より郭沫若への手紙 その1-2、3（上）本誌第4号（2017年）の補注19で触れている。

【補注7】 顧文・岩佐『三葉集』田漢より郭沫若への手紙 その1-2、3（上）本誌第4号（2017年）、71-72頁で触れている宋春舫（北京大学教授、当時の西欧近代劇研究の第一人者）訳ズーデルマン

<sup>1</sup> ドイツ語：笑気。

『推霞』序の評語であろう。

【補注 8】 ネスピット・Eはイギリスの女流作家。児童文学作家として知られ、邦訳に『巢なの妖精』などがある。夫のリンベルト・ブランデッドは 19 世紀後半に設立された社会改良主義団体フェビアン協会の発起人であった。『外国文学大辞典』春風文芸出版社・遼寧少年児童出版社、1989 年 11 月による。

【補注 9】 催粧とは、嫁をもらうまえに行う行事であるが、ここでは、二人の結婚前に二人の結婚を祝う宴のことを指す。

【補注 10】 「あんな結果」の内容は『幽霊』全体の構成に関わるので、粗筋を辿っておきたい。ヒロインのアルヴィング夫人の夫は、立派な人という名声を得ているが、実は生前は女好きの道楽者、放蕩で梅毒にかかり亡くなった。彼はかつて女中に手を出し、その結果生まれた女兒レジーナが今は女中として夫人に仕えている。レジーナの母は大工のエングストランと結婚し、レジーナはエングストランの娘として育った。

アルヴィング夫人と夫の間にはパリで修業中の画家の卵の息子がいる。この息子は今帰省しているが、パリで医者から梅毒の末期と診断されている。父の遺伝である。ただ夫人はまだそのことを知らない。

この息子が、レジーナと肉体関係を持ってしまう。そのことを知った夫人は、レジーナと息子に、実は二人は血のつながった実の兄妹だと告げる。レジーナはショックを受け、売春婦になってやる、と出ていく。息子は二人きりになると、母に梅毒が脳を犯す末期症状で、次に発作が起きたら死ぬ。その時はモルヒネを致死量打ってほしいと母に迫る。夫人は拒否するが、その時息子は発作に襲われる。そしてモルヒネを手にしち尽くす母親の前で息子は恍惚となって「太陽、太陽」と呟なか、幕が下りる。

「あんな結果」とは、劇全体で示されるアルヴィング夫人をとりまく腐臭、夫の放蕩、梅毒、家庭内の乱倫、それを必死で糊塗し、夫と家の名誉を守ってきた末に発覚した新たな腐臭。息子の梅毒、息子

とレジーナ（夫の乱倫の子）の近親相姦、残されたのは夫人の心の廢墟に巣くう空虚である。これらを田漢は「あんな結果」と書いたといえよう。

【補注 11】 『沈鐘』については、顧文・岩佐『三葉集』田漢より郭沫若への手紙 その 1-2, 3 (上) 本誌第 4 号 (2017 年) 69 頁に既出。「昨年、ああ一昨年だったかなあ、須磨子が演じている Hauptmann の Die versunkene Glocke をみましたが」と『沈鐘』はドイツ語表記だった。だが引用のセリフは英語表記で、田漢が英語テキストでこの作品を読んだことが分かる。

【補注 12】 ネオ・ロマンティズム（新ロマン主義）について、田漢がどのような理解をしていたかは、明らかではない。ここでは文学を志す同時期の中国人留学生たちから注目されていた、厨川白村の『近代文学十講』（大日本図書、1912）の解説を引いておきたい。同書第九講は「非物質主義の文芸（其一）に自然主義の後に起こった文芸思潮として「新浪漫派」を取り上げ詳説しているが、ここでは彼が引くアーサー・シモンズの比喩をまず紹介する。それは「目に見ゆる世界がもはや現実ではなく、見えざる世界が夢ではないという意味の新文学である」そしてさらに「われらが心霊に感ずるあらゆる妙趣のうち最も吾人を動かすものは神秘のそれならずや。赤裸々の美は美にあらず。われらの最も愛するものは未知のものなり」というアナトール・フランスの語を引き、最近の「新文学」つまり「新ロマン主義」は「主としてかかる人生の神秘的・夢想的方面を取り扱ふ文学である。換言すれば、人生の隠れた一面を暗示し、自然の目に見えざる真相を具象的なものによって表はし、それを crystallize し symbolize したものである。」と規定するのである。だが、それは前時代の浪漫派のように「ひたすら夢幻空想の境にさまよふ理想憧憬時代の文學ではない」。「近代の懷疑に出立してさらに一步深く進んだもの」「驚くべきほど沈静の態度を以て極めて冷ややかに厳かに人生を達観し、更にその裏面にあって未だ知られざる微妙な或物（サムシング）に触れようとする努力である」。

【補注 13】榊原貴教「メーテルリンク翻訳作品年表」（『翻訳と歴史』ナダ出版センター、第16号2003年7月）によれば、「青い鳥」の翻訳紹介が始まったのは1910年からで、同年5月には金星草訳が『スバル』に、10月には森ほのほによる『青い鳥』の梗概が『歌舞伎』に掲載されている。田漢がこの手紙を書いた1920年2月29日以前には、これらを含め、雑誌に異なる訳者による翻訳4編が掲載され、また単行本が5冊出版されている（うち荒木秀一訳『近代劇物語1』大日本図書、1913年に所収。また、うち3冊は若月紫蘭が異なる出版社から出したもの）。田漢が挙げている2種類が単行本を指すのか、雑誌掲載訳を指すのか不明であり、その特定ができない。また、田漢が見た有楽座の上演脚本は楠山正雄訳で、直後の同年3月に新潮社から『近代劇選集1』として出版された。

【補注 14】京劇の演目。武勇に優れた駱宏勳が権力者に絡まれている武芸者の娘・花碧蓮を助けたことから愛し合うようになり、苦難を経て結ばれる物語（）。小香紅は京劇俳優。共舞台は上海にあった娯楽センター大世界の中にあつた劇場。27年に専用劇場として新築され、20年代から30年代にかけて上海四大京劇舞台の一つとして栄えた。

【補注 15】郭沫若は2月25日に田漢に宛てた手紙で「僕たちは、同士の多くを集め、「ゲーテ研究会」のようなものを組織したらどうでしょうか。まず彼のすべての名作と傑作、彼についての著名な学者たちの研究を、全部翻訳紹介し、ひとつの系統的な研究をします。ゲーテの研究が終わったら、また別の対象へ移行して行きます。ぼくのこの考えを君はどう思いますか？お聞かせください。」と書いている。顧文・岩佐『『三葉集』郭沫若より田間への手紙 その1-3』（本紀要2016年度、22頁）。ここはその返事である。

【補注 16】日本語名『詩と真実』ゲーテの自叙伝。

【補注 17】生田長江の翻訳は1915年らしいが、いま詳しいデータを欠く。なお、生田の翻訳は1924年、ゲーテ著『我が生活より 作為と真実（前編）』として聚英閣より出版されている。

【補注 18】塩釜天颯（しおかま てんひょう、1884-1910、旧制第四高等学校教授）の著書『ゲーテの詩研究』明治43年、博文館刊、を指す。本訳文の拠った『郭沫若全集』第15巻所収の「三葉集」が作者の名を Shokawa としているのは誤りで、Shiogama あるいは Shiokama とすべきである。なお『少年中国』では Shokana と表記されている。塩釜のこの本は国会図書館デジタルコレクションで原著が実見できる。原著は全6編から成るが、田漢が訳したのは、付録の「訳者敬辞」に田漢が書くように第1編「ゲーテの詩に現はれたる思想」（さらに「一、ゲーテの詩に現はれたる世界観（自然観及宗教観）、二、ゲーテの詩に現はれたる道義観、三、ゲーテの詩に現はれたる芸術観」に分けて記述）の全訳である。『少年中国』では、一、二、三をそれぞれA、B、Cと表記している。

#### 解説（岩佐昌暉）

今号は田漢の郭沫若宛書信の第3通目の後半、つまり最後のものということになる。前号の解説で、この手紙には、当時のアジアにおける文化的中心地東京に暮らす田漢の「知的余裕」のようなものが感じられる。「彼が無意識に、あるいは意識して書き連ねる人名や書名、自分が読んだ雑誌、見た演劇についての情報の背後に、一種の優越感が見え隠れするのを感じてしまう」と書いた。そしてそれらは「文学的教養がゲーテやシラーといった古典文学の範囲にとどまっていた、近代演劇の知識を欠いていた郭沫若には「威嚇の語」のように響いたのではないか」という感想も記した。郭沫若が有島武郎を買い、その戯曲に対する分析を田漢に書き送ったのも、実は彼に対抗するためだったのではないかと、という推測も書いた。それらの感想は、後半の翻訳を通じ、弱まるどころかますます確信に近くなっていくのを感じる。

ただ、田漢に優越感があつたとしても、それは東京に住んでいるというだけの単純なものではなかったことも見ておく必要があるだろう。彼の優越感、自分が現下の中国で誰よりも近代劇を読んでお

り、誰よりもよく近代劇に通暁しているという強い自負心に基づいていたと思う。ここでは、そのことを見ておきたいと思う。

この手紙の前半（前号掲載の「上」）で田漢は初めて自分の将来の希望を語っている。「僕の今後の生涯は、恐らくさまざまな面に亘るでしょう。しかし、文芸評論家、劇作家、画家と詩人の領域を出ないと思います」と、書いたあと彼は「文芸批評家になることに情熱を傾けているほか、一番熱心にとりくんでいるのはDramatistになることです」と宣言する。では田漢はどういう劇作家を目指したのだろうか。彼は、自分が「以前A Budding Ibsen in China（中国におけるイプセンの卵）と署名した」ことがあると明かしている。その後で「僕がいかに身の程知らずだったかわかるでしょう」と付け加えてはいるが、それは表面的な謙譲の辞にすぎず、本心はおそらくイプセンのような社会派の劇作家になろうという意志と、そうなれるという自負に溢れていたのだと思う。

そのための準備を彼は怠っていない。「現在僕が収集している近代劇の脚本は50種余りで、大体とても重要なものです」と言うのは、恐らくその大部分が英語版であろう。冗談めかして「百種類までになったら、記念パーティを開こうと思っています。その時にはあなたも是非来てください」と書く（以上、引用はいずれも前号71頁左段）が、それが冗談などではないことは、本号で、これは脚本ではないが、ゲーテの『詩と真実』の英語版を「昨年末購入」したとも書いていて、必要な書物は手に入れる努力を怠っていないことから分かる。

今号に訳出した手紙には、前号に続いて西欧近代劇の名作に関する、紹介、主題や思想の分析が数多く書かれている。フリードリッヒ ヘッベル（ドイツ）の『マリア・マグダレーネ』、ストリンデルベルグの『令嬢ジュリ』、ズーダーマンの『名誉』、『故郷』など、イプセンの『ヘッダ・カーブレル』、『小さなエイヨルフ』、『幽霊』などの登場人物たちが、結婚や恋愛を軸に観察され、明快に分析されている。またハウプトマンの『沈鐘』、メーテルリンクの『青

い鳥』などが、自身の実際の観劇体験と「ネオ・ロマンティシズム」演劇への理解を切り口に論じられている。郭沫若宛の私信とは言え、これは彼自身が書くように（9頁）「近代劇と恋愛問題、結婚問題に関する小論文」といってよく、その内容は彼が文芸批評家、ないし社会批評家の資質を持つことをも示していると言えよう。

恋愛問題と結婚問題も、大正期のメディアが一貫して取り上げてきた大きなテーマであった。郭沫若個人にとっても、それらは、故国に妻を残しながら佐藤富子と〈長距離恋愛〉の挙句、岡山に呼び寄せ、同棲し、ついに子を生ずにいたる一連の経緯は、中国の両親や正妻にそれをどう納得させるかという、差し迫った現実問題であった。と同時に、五四運動前後から故国で展開された新思想と日本留学後に触れた西欧近代思想の洗礼を受けた知識人たる自分の倫理道德上の問題として、どうしても解決しなければならぬ実践的課題と結びついたテーマであった。だが、この面でも田漢の視野は郭沫若よりはるかに広がった。平塚らいてふ、エレン・ケイといった論壇話題の人物名を列挙し、その主張の一端を手際よく紹介した田漢の手紙は、郭沫若に強い刺激を与えたであろう。

ただ、田漢が平塚らいてふやエレン・ケイらの主張に触れることはあっても、日本社会における具体的な恋愛や結婚問題には全く触れていないことにも注意を払っておかねばなるまい。たとえば、田漢は島村抱月と松井須磨子について、抱月の死と前年秋の須磨子の自殺という当時のジャーナリスティックな話題について書きはしても、抱月と須磨子の不倫スキャンダルについては触れていない。そうした社会問題についての沈黙は郭沫若も同様である。例えばこの手紙の翌年に起きた炭鉱王伊藤伝衛門の妻柳原白蓮と大学生宮崎竜介との「駆け落ち事件」は、郭沫若の地元福岡での出来事であり、当然大きな話題になったはずだが、郭沫若は一切触れていない。（私は個人的には、郭沫若には、日本社会のゴシップを拾う雑誌や新聞を読んでいなかったのではないか、また、そういうことを話題にできる友人

がいなかったのではないかと考えているが、それについてはいずれ述べたい。)

また、田漢はこの手紙の中で、将来の中国演劇の発展のために何が必要かという問題提起も行っている。それは、「よき(良質の)観劇階級の養成」ということである。以下、それを見ておきたい。

有楽座で上演された民衆座による「青い鳥」を見たあと、田漢は次のような感想を漏らす。

「以前英訳の「青い鳥」の脚本を見たが、どうしてもその味わいが分からなかった。またパン、火、犬、猫、ミルクといった登場人物をどう扱うか分からなかった。それが今度の民衆座の公演でああこうやるのかとわかった。それで思い出すのが上海で見た京劇「宏碧縁」だ。女優たちの資質は素晴らしいのに、それを引き出すいい脚本がない。演技方法を教える教育もない。さらに、彼女たちが演じているのは何なのかを理解するよき観劇階級がない。これからの自分たちの責任は重い。」

田漢はさらに、日本で近代劇を見たが、見終わった後、「何を演じているか分からない」と言う観客が多かったとし、文芸の素養を持たない観客と情緒劇、象徴劇、神秘劇、問題劇について語ることは難しい。「新劇の隆盛を望むなら、まずよき観劇階級を養成しなければならない」と強調するのである。

私は、以上の問題提起は、田漢が自分の位置を単なる留学生にとどめおくのではなく、(おそらく彼自身も十分自覚することなく)未来の中国演劇の指導者という視点から、日本や中国の演劇をとりまく

状況を観察していることの表れだと考える。だが、よき観劇階級を欠くという状況は、ようやく近代劇を移入したばかりの日本の文化状況から言えば、当たり前のことだったとも言える。しかし、田漢にとって、アジアの文化的中心都市・東京も近代演劇への情熱や意欲を満たすには十分な街ではなかった。

彼が「ぼくはもう日本に長く居たくありません。機会があればロンドン、あるいはニューヨーク方面へ行ってみたいです。ロンドンはいっそう行きたいところです」そこは「大陸とも接近しており、いつでもパリ、ベルリン、ローマなどの諸首都の芸術界と触れ合うことができます」という、ヨーロッパへの憧れの語でこの手紙を結んでいるのは、西欧近代劇をひたすら吸収しつつあった、大正期の日本の演劇文化への田漢の絶望の表現だったといってもいい。その意味ではこの手紙は大正期の日本文化の〈近代〉の移植性を意図せずして告発したものでもあった。

最後に、田漢が郭沫若に対し、これらの往復書簡の発表をもちかけていることにも注意しておきたい。この段階で田間に後の『三葉集』刊行の意図があったかどうかは分からない。だが、そうした構想を抱きながら郭沫若宛の手紙を書いていたのだとすれば、この手紙に現れる田漢の西欧近代劇や、日本の演劇界への評論は、たんなる優越感の発露とは違う意味合いをもつかもしい。そしてそれはまた田漢論への新たな視点を提供するかもしれない、と思ったりする。(2018/10/20 補遺)